へ古して、今さらいふもくどければ、かの愛蓮にならひて、たゞ此類の品定せむに、酒は富貴なる者なり、茶は隱逸なる者なり、煙草はさしづめ君子の番にあたりて、用る時は一座に雲を起し、玄りぞく時は袖の内に隱る、こゝに神龍の働ありともいふべし、下戸と妖物は世にすたれて、下戸は猶少からず、今や稀なるは、たばこぎらひにして、野にも吸、山にも吸へば、たばこ入の風流、日々にさかんに、きせるの物ずき、とし〳〵にあたらしくて、若輩の目を迷せども、楠が金剛山の壁書をみて思ふに、たばこはさがぬを專とし、きせるはよく通り、灰吹はころばぬを最上とこそ、さらば色みえでうつろふ花の人心にも、畢竟そのもの、本情實儀をうしなはざれとなり、

〔めざまし草〕古今形勢

たばことといふもの、異國よりこゝへ傳來せしより二百年にあまりて、久しきならはしとなりぬれば、世の人貴賤ともに、其謂をも知らず、よるひるとなくけふらすることゝなりて、今はひとひもこのきみなくてはともいふべく、まことに酒にも茶にもまさるものになん、されば手と口とに離さず、玄ばしもかたはらにおかねば事かくるがごとし、げにも飽けばうゑしめ、飢ればあかしめ、醒ればゑはしめ、醉ばさますとぞ、世の人なべて此功德を知り、世界のかぎり所として此草を植ぬもなく、人として此葉を嗜ぬもなく、世に行れて、年暦百年にも及びしころほひより、詩にも賦し、歌にも詠じ、これを稱美して止ず、其くさ〳〵の德をいはんには、あつさをも忘れ、寒さをもしのぎ、夏の日永の眠がちなるをさまし、春の曉の覺めがたき夢をもやぶり、あるは秋冬の夜ながき、老が身のねぶりがたきには、從者女童など、たばこ吸ふ火はありやなしやと問ひて、わびしきを助くる心しらひを喜び、又何くれと物がなしきうきをもわすれ、あるはすまのうらさびしき、ひとり住の身の上には、よきしほがまのけぶり草とも知らるゝなり、或人の口ずさめるに、

昔し誰が寢覺の床のさびしさを忘るゝ草の種はまきけん、とあるもさることなり、又貞柳と